

おわりに

情報メディア創成学類 教授 磯谷順一

この報告書は、平成 19 年度から平成 21 年度の 3 年間にわたる現代 GP「異分野学生の協働によるコンテンツ開発演習」の中間報告である。平成 19 年度については活動報告と評価委員会による評価をまとめている。平成 20 年度については活動報告をまとめ、平成 21 年 3 月 23 日に開催される評価委員会で評価していただく材料のひとつになっている。

この現代 GP プログラムは筑波大学情報学群が中心になってはいるが、総合大学である筑波大学のメリットを活かした教育改革のプログラムの提案であり、その試行である。そのために、芸術専門学群をはじめ他の学群・学類にも協力していただいている。また、このような協調的取組を大学間連携に広げる試みにおいて、京都精華大学マンガ学部にも協力していただいている。

筑波大学では、1・2 年生には、異分野入門を目的のひとつに含む「総合科目」が開設されており、異なる学群・学類の学生が同じ教室で、自分の所属とは異なる学群・学類の先生の授業を受ける機会がある。それに対して、我々の現代 GP プログラムは、専門科目を学んだ 3・4 年生あるいは大学院生を対象にしている。異分野の学生が、それぞれの培われた専門知識・技能を持つ役割の担い手として集まり、グループとして「コンテンツを作る」という協働作業の演習をするという試みである。実際には、平成 19 年度に新設された情報メディア創成学類においては 3 年生の誕生を平成 21 年度まで待たねばならないこともあり、対象を 2 年生にまで広げて実施した。

我々の狙いは、情報技術（情報系学生）、デザイン（芸術系学生）、表現対象の内容（主題領域学生）といういわば 3 つの異なる分野の専門家の協調作業によって成り立つコンテンツづくりのモデルとなる場を設定し、コンテンツ作りに欠かせないコミュニケーション能力（異分野の参加者の主張を理解し、また、異分野の参加者に自分の考えを理解できるように表現する能力）の養成にあった。

しかし、学生は単なるコミュニケーション能力養成を超えた大きな可能性をもっていたようである。平成 19 年度は、準備不足という点で、受講していただいた学生には大変申し訳なかったが、2 年目以降に活かすために、3 学期にいくつか演習のトラックを実施した。そのなかに、学生の間でリーダーシップが生まれ、すばらしいチームとして機能し、授業時間の枠を超えて作業に集まり、コンテンツを完成させるというトラックがあったことはうれしかった。このトラックには評価委員会からも、「技術上の問題点は多いが、できあがりのコンテンツには『熱』が感じられる」というコメントをいただいている。このような『熱』を引き出す力が、『コンテンツ作り』にあり、『異分野学生の集まる相乗効果』にあるとしたら、現代 GP「異分野学生の協働によるコンテンツ開発演習」の狙いが正しかったと言えよう。いったん走り出し、形が見えてくると『コンテンツ作り』への学生の意欲はますます高まり、チーム全体が授業時間の枠を超えてコンテンツの完成まで走りきってしまったことはすばらしかった。自分の学類の学生に、「大学で自分を育てるのは通常の授業だけではない。現代 GP に参加してみたら」と思わず勧めてしまう。

プレゼンテーションとしてはごく短時間の CG アニメーションや映画も、実は膨大な作業の上に成り立っている。魅力あるコンテンツには作業量が欠かせないのに対して、授業としての演習の時間枠でできることは限られている。平成 20 年度には、パソコンを学生に貸し出して、週 1

回の授業の間の自由な時間に学生が作業をするようにしたトラックもあるようである。

異なる分野の研究者を集めただけでは融合領域の研究を立ち上げ、育てるのは非常に難しいことを、我々は経験してきている。それに比べると、現代 GP プログラムの場合は、異なる分野からやってきた学生は、限られた時間の中で協調作業をやりとげ、コンテンツに結実させていることに注目したい。参加した学生の『コンテンツ作り』への強い意欲によるところが大きいとはいえ、このような形の教育のもたらす効果を改めて感じさせられる。異分野とのコミュニケーション能力にとどまらず、『コンテンツ作り』の総合力を自ら養うことに意欲をもち、2つ以上の分野にわたって学習していくプランを模索している学生も現れている。

情報技術、デザイン、表現対象の主題内容という3つの異分野のなかで、特に、デザインの柱において芸術専門学群の大きな協力・支援を受けて、この現代 GP プログラムが成り立ってきている。現代 GP プログラムは時代の要請する教育に取り組む教育改革と位置づけられている。講義・演習の3年目を実施する平成21年度は、この教育改革のプログラムの発展・展開への道をつなげる年でもあると考えられる。

最後に、本取組のマネジメントチームの一員として、啓発セミナーで講演していただいた学外の先生方に感謝いたします。講義・セミナーチームおよび演習実行チームの筑波大学（情報学群および芸術専門学群）の教員の皆様、京都精華大学マンガ学部の教員の皆様、および図書館情報等支援室の皆様、平成21年度もご協力をお願いいたします。本取組のスタートにあたってご指導いただいた工藤教育担当副学長に感謝申し上げます。